AMDA 年次報告書

2010 年度は、ハイチ地震復興支援で始まり、東日本大震災被災地での緊急医療活動を実施しつつ年度を超えることとなりました。この日本での未曽有の大災害に直面したことで、私たち一人一人がそれぞれの立場で、これまでにあまり意識していなかった「日常」や「相互扶助」というものについて考え、自らに問うことが始まったように思います。

実際の活動面では、これまで AMDA が様々な地域で実施してきた緊急救援活動の経験から大切に考えてきた人道援助の三原則 — ①誰にでも人の役に立ちたい気持ちがある。②その気持ちの前には、年齢・性別・宗教・民族の壁はない。③援助を受ける側にもプライドがある。— と、活動の手法である「ローカルイニシアチブ」を、これまで行ってきたように、東日本大震災でも実践しました。そしてこれまでと同じように受け入れられました。

設立 27 年目の AMDA は様々な分野の方とのネットワークを一層充実させ、いろいろな方が復興支援活動やスポーツ交流等に参加できる機会を提供することで「市民参加型人道支援外交」の試みを実践していきたいと考えます。また東日本大震災被災地の支援のひとつとして、多大な支援をしてくれた国際社会との緊密な連携のもとに「AMDA 東日本大震災国際奨学金」を設置しました。近い将来、東北の地から日本を背負って立つような人材が輩出されることを信じています。

緊急支援活動

■ハイチ地震復興支援（義肢支援・スポーツ親善交流・日本招へい）

◇**実施場所**　ハイチ共和国西県デルマ市（首都ポルトープランス市郊外）

◇**実施期間**

2010年5月1日～2011年1月22日

◇**派遣者**

ハイチ共和国：

八尾直毅　義肢装具士、

大前良輔　義肢装具士

ドミニカ共和国：

森田佳奈子　調整員

※スポーツ親善交流の随行：

菅波　茂、竹谷和子、石岡未和、ヴィーラヴァーグ・ニッティアン

◇**現地での参加者を含めた事業チーム構成**

ハイチ共和国：　マック・フレデリック歯科医師・調整員

◇**事業内容**

2010年1月12日にハイチ共和国首都ポルトープランス近郊でマグニチュード7.0の地震が発生し、31万人以上の死者を出した。AMDAは2010年1月15日から約3か月間にわたり、延べ36人を多国籍医師団として派遣した。地震により肢体を切断した人が大勢いたことから、AMDAは2010年5月に義肢支援プロジェクトを開始した。2010年5月の時点で、義足製作工房はドミニカ共和国・エリアスピーニャ（ハイチとの国境の町）のローサ病院に設置される予定だった。しかしながら、ハイチ地震の震源に近いポルトープランスに義足製作工房を設置するほうがより効果的との観点から、ポルトープランス近郊で義足製作工房を設置する準備を進めた。

2010年8月16日～25日には、ドミニカ共和国のサントドミンゴ自治大学で、ハイチ・ドミニカ共和国・日本の中学生たちによるスポーツ親善交流事業が行われた。ハイチから16人、ドミニカ共和国からは20人の少年が参加した。日本からは、大阪・岡山・広島から中学生17人と高校生1人が参加した。サッカーの交流試合の他に、文化交流、青年海外協力隊の活動する村の訪問、帰路のニューヨーク国連本部の見学が行われた。

2010年9月にようやくAMDA義足製作工房がデルマ市ダッシュ病院に開設された。9月下旬には、日本から送られた義足のリサイクル部品500点と、米国プエルトリコのOMEGA社で購入した大型機械（プラスティックを溶解する機械や研磨に使う機械）が到着した。9月末から本格的に義足製作活動が行われ、2010年9月末から12月末までの3か月間で42人の義足が完成した。2011年1月14日から1月22日まで、アムダから義足提供を受けたハイチ地震被災者のガエル・エズナールさんと、ハイチ・アムダ調整員のマック・フレデリックを日本に招へいし、阪神淡路大震災の震災障がい者の方々との交流を行った。

◇**現地協力機関**

ドミニカ共和国：

在ドミニカ共和国日本大使館、在ドミニカ共和国ハイチ大使館、サントドミンゴ自治大学、サンティアゴ科学技術大学、青年海外協力隊隊員

ハイチ共和国：

ハイチ共和国西県デルマ市ダッシュ病院

岡山での交流会

■キルギスタン国内避難民に対する緊急医療支援活動

◇**実施場所**　キルギス共和国首都ビシュケク、南部オシ州の州都オシ

◇**実施期間**　2010年7月1日～7月7日

◇**派遣者**　ヴィーラヴァーグ・ニッティヤン調整員（AMDA本部）、ガルバルシン・アベウオヴァ医師（カザフスタン支部）

◇**現地での参加者を含めた事業チーム構成**

AMDA派遣者と保健省が手配した同行者

◇**事業内容**

中央アジアのキルギス共和国で、2010年6月中旬にキルギス系民族とウズベク系を中心とする少数派民族との間で騒乱が発生し、犠牲者は208人にのぼった（6月21日政府発表）。報道では避難生活を送る住民は30～40万人と言われた。AMDAは緊急医療支援チームを派遣することを決定し、本部から調整員1人とAMDAカザフスタン支部から医師1人を派遣した。今回の緊急救援ではキルギス共和国保健省から地域を問わず医療行為を行う許可を得た。また、安全確保のための同行者を手配という協力を得た。

首都ビシュケクではビシュケク国立病院、国立母子福祉センター、ビシュケク外傷・整形外科研究センターでは内乱で負傷した25名の患者と面会した。患者のほとんどに銃撃による被弾、骨折、頭蓋骨および脊椎の損傷等が見られた。病院側及び患者当人と相談した結果、患者本人が購入しなければならない予定だった医薬品をAMDAから寄贈した。

内乱の発端となった南部オシでは、現地NGOインタービリムと協力し、「オシ地区オン・アディール」「カラ・スー地区アク・タッシュ村」「オシ南部ユジュニィ村」「オシ地区『カマロヴァ』（障害者およびその家族を中心とした難民キャンプ）」の四つの地域において国内避難民に対する巡回診療を行った。4ヶ所のいずれのキャンプにおいても避難民の大半は女性と子供であった。これは男達が日中に自宅まで戻り家財を守っていた為である。主な怪我や病状については、高血症、頭痛、腹部における合併症、胃感染、被弾による外傷のほか、婦人病の症状も多く見られた。AMDAでは被災者家族に医薬品と衛生物資を寄贈した。ビシュケクとオシのいずれの避難民キャンプも基本的な生活物資が欠乏しており、医療ケアにおいては皆無だった。

◇派遣者の声

騒乱から2週間以上たった訪問時点でも、女性や子供達の多くが今回の惨事におののいていた。家族を失った者も少なくない。このほか、拉致被害に遭った避難者やガソリンに放たれた火で火傷を負ったけが人も見られた。ガルバルシン医師によれば、避難者の表情に精神的なトラウマが明らかであり、精神科での適切な処置が必要な状況だった。

◇現地協力機関

現地NGO「センター・インタービリム」

■中国甘粛省の土砂災害に対する緊急支援活動

◇実施場所　中華人民共和国甘粛省

◇実施期間　2010年8月12日

◇派遣者　笹山徳治氏（日中青年交流協会理事長、四川省国際友好都市事業代表）

◇現地協力機関（市保健所、市役所など）

中国四川省人民政府渉外部

◇協力団体

中国四川省人民政府渉外部

◇事業内容

2010年8月8日中華人民共和国甘粛省で豪雨による大規模な土砂流が発生し、付近の河川がせき止められて洪水が発生。甘粛省の南部に位置する四川省でも洪水の被害が報告され、中国政府によると、この災害により約1100人が死亡、約600人が行方不明となった(8月13日時点)。

AMDAは、2010年の四川大地震の緊急救援活動で調整員を務めた笹山徳治氏（日中青年交流協会理事長、四川省国際友好都市事業代表）を通じて、四川省人民政府渉外部に中国甘粛省の土砂災害に対する義捐金を贈呈した。

■パキスタン洪水被災者に対する緊急医療支援活動とフォローアップ活動

◇実施場所　パキスタン・イスラム共和国旧北西辺境州ノウシェラ県（Nowshera District, Khyber-Pakhtunkhwa Province）、シンド州タッタ県（Thatta District, Sindh Province）

◇実施期間　2010年9月2日から10月9日（緊急医療支援）、2011年1月（フォローアップ）

◇派遣者　計：8人

第1医療チーム（菅波茂医師、渕崎祐一

医師、渡辺美英看護師、ニティアン・ヴィーラバグ調整員、土佐光章調整員）

第2医療チーム（細村幹夫医師、米田哲医師、松本圭古看護師、土佐光章調整員）

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

計：12人

AMDAアフガニスタン支部の医師4人、看護師2人

AMDAインドネシア支部の医師2人、看護師1人

AMDAバングラデシュ支部の医師1人、医療助手1人、調整員1人

◇現地協力機関（市保健所、市役所など）

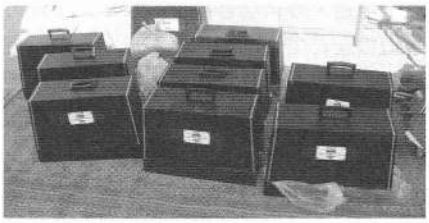
National Rural Support Programme (NRSP)

◇協力団体

特になし

◇事業内容

7月末からの長雨により建国史上最悪といわれる水害に見舞われたパキスタンでは、政府国家災害対策局の発表で、10月9日時点で、被災者約2000万人、死者推定1961人、負傷者2907人、破損家屋190万戸余りという発表に至った。AMDAは9月2日にAMDAアフガニスタンの医師2人をイスラマバードに派遣し、9月6日からAMDAアフガニスタン医療チームの医師2人・看護師2人が旧北西辺境州ノウシェラ県のアザクヘルキャンプ（ペシャワールから15km）で巡回診療を開始した。AMDAアフガニスタンは9月6日から9月30日までアザクヘルキャンプなどノウシェラ県内の避難キャンプで巡回診療を行い、合計で2464人を診療した。パキスタンでの洪水被害が南部にも拡大したことを受けて、9月16日からは南東部シンド州タッタ県にAMDA岡山本部から第1医療チームを派遣し、その後インドネシアチーム、バングラデシュチームが加わった。9月17日から10月8日までに南部で合計2515人を診療し、全体で4979人を診療した。復興支援として2011年1月にAMDAの現地協力団体であるハムダード大学を通じて、カラチ郊外の避難キャンプに大型



寄贈したミシン

テント（30メートル×15メートル）を設置し、新しい10台のミシンを置き、被災した女性がパッチワークで掛け布団を縫い、それを売って現金収入を得ることができるように支援を行った。

■ AMDAチリ地震緊急医療支援活動半年後の追跡調査・支援活動

◇実施場所　チリ共和国　第7マウレ州タルカ県コンスティツシオン沿岸部

◇実施期間

2010年9月28日から10月5日

◇派遣者　調整員/森田佳奈子、看護師/石岡未和

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

（合計44名）

ローカルコーディネーター：

パブロ ガエテ氏

コンスティツシオン地域診療所（CESFAM Cerro Alto）所長（医師）、ソーシャルワーカー1名、準看護師3名、運転手3名

マウレ カトリック大学医学部：

医学部長（医師）1名、専門医5名、医学部生（計29名）

◇事業内容

2010年2月27日に起きたチリ大地震（M8.8）で、AMDAは甚大な津波被害を

被った第７マウレ州コンスティツシオンに多国籍医師団を派遣し、乳幼児のための健康・衛生指導を行って乳幼児支援プロジェクトに発展させた。

AMDA 救援チームの帰国から３カ月後の６月に第１回追跡調査を行い、被災者への仮設シェルターは増えていても、電気・水道・ガスなど基本的なインフラの復旧は進んでいないことが分かった。継続する余震もあり被災者たちは長引く避難生活による疲労の色が濃く、早急な復旧の兆しを待ちわびていた。

そこで AMDA は地震発生から７カ月後の９月に、同地区へ再支援を行うことを決めた。

緊急支援で AMDA と協力した現地スタッフの他、マウレ カトリック大学（以下 UCM とする）の医師・医学部学生と協力し、準備段階からチリ側と緊密な連携のもとに仕事を進めた。

活動内容はコンスティツシオン地域診療所が選出した 12 歳以下の子供を持つ家庭を対象に仮設住宅地区や巡回家庭訪問をし、集団又は個別で健康教育を行った後に物資を配給する、というものである。沿岸地域では、住民が過酷な環境下での生活を強いられていた。仮設シェルターで生活する人々は、仮設トイレや風呂場さえ不足しており、需要の半分しか満たされていないという状況だった。

UCM 医学部の１年生と３年生は、コンスティツシオン診療所の外の仮設住宅地や近隣の貧困地域を巡回し、12 歳以下の子供がいる 120 世帯を訪問して健康指導や物資の配給を行った。医学部生らは手作りのパンフレットを準備し、衛生習慣の大切さを強調した。UCM の専門医師らはクリニックの診療活動を手伝い、医学部５年生と６年生のグループは診療所内で地域住民への健康教育講座を行った。UCM の学生が参加したことで、コンスティツシオン訪問は、被災者救援と医学生に大学では学べないプライマリー医療及び地域健康教育の訓練の場を与えるという二つの目的を達成することになった。

＜配布した洗面用具キット（120 セット）＞
シャンプー、石鹸、歯磨き粉、アルコールジェル、抗シラミシャンプー、抗シラミ用の櫛

◇受益者の声　（無い場合は派遣者の声）
沿岸部の漁村に住む老夫婦：
「また、来てくれてありがとう。地震後は家も仕事もなくなってしまって大変だったけど、親戚を頼ってなんとか仕事を始めた。街の中での物売りよ。生活は厳しいけど、生きていられたことに感謝している。また地震と津波が来るのは怖いけど、負けずにあの家に住み続けるわ。私はあの場所が大好きだから。」

避難所の母親：
「７ヶ月経って暮らしはよくなってきたけれど、子供たちが地震による恐怖体験のトラウマを持ってしまったよう。夜中うなされて起きることもあるので心配。」
避難所を取り仕切るヘルスワーカー：
「地震後、また私たちの所へ来てくれたのは日本のあなたたちだけよ！今も忘れずに覚えていてくれたことに感謝します。神の御加護を！」

◇現地協力機関
Universidad Catlica del MAULE
（UCM：マウレ　カトリック大学医学部）
CESFAM セロアルト
（コンスティツシオン地域診療所）
コンスティツシオン市役所・市長、厚生省タルカ地域保健事務所

■スマトラ島沖地震に対する緊急医療支援活動

◇実施場所　インドネシア共和国西スマトラ州北パガイ島シカカップ
◇実施期間
2010 年 10 月 29 日～ 11 月２日
◇派遣者
ドナルド・ドダ　麻酔科医　インドネシア・ハサヌディン大学医学部付属病院勤務
ファハルディン　麻酔科医　インドネシア・ハサヌディン大学医学部付属病院勤務
バスタミン　看護師　インドネシア・ハサヌディン大学医学部付属病院勤務
◇現地での参加者を含めた事業チーム構成
上に同じ

◇事業内容
インドネシア共和国スマトラ島沖で 2010 年 10 月 25 日夜に震源地をスマトラ島西側のメンタワイ諸島の南 280 キロとし、震源の深さは水面から約 20 キロ、マグニチュード (M)7.7 の地震が発生。これに伴う津波の高さは３～４メートルに達し、最も被害が大きい南・北パガイ島では内陸部の数百メートル中まで波が入り込み、10 か所以上の村が壊滅状態となった。津波の死者は 10 月 28 日時点で 370 人に達し、行方不明者は 338 人にのぼった。

AMDA インドネシア支部から２人の医師と１人の看護師が、支部のあるスラウェシ島のウジュンパンダンからジャカルタを経由し、現地時間の 10 月 29 日にスマトラ島パダンに到着。AMDA インドネシア医療チームは、パダンから船泊を経て、10 月 31 日に北パガイ島シカカップに到着。国家防災庁や地元保健当局で情報収集した後、シカカップ保健所での医療活動に従事した。翌 11 月１日にはシカカップ保健所から 500 mほど離れたシカカップ軍医療支援第一ユニット野外診療所での医療活動に従事した。僻地にも軍や他の支援が入っており、シカカップにも充分な支援医師がいることから、AMDA インドネシアチームは 11 月２日に北パガイ島での緊急医療活動を終え帰郷の途についた。

◇現地協力機関
シカカップ軍医療支援第一ユニット野外診療所

■インドネシア火山噴火被害に対する緊急医療支援活動・フォローアップ活動

◇実施場所　インドネシア共和国中部ジャワ州マゲラン県
◇実施期間　2010 年 11 月 16 日～ 11 月 23 日（**緊急支援**）、2011 年５月５日～８日（**フォローアップ**）
◇派遣者　石岡未和　看護師（AMDA 本部）、米田哲　小児科医師（メータオクリニック / タイ国勤務）
◇現地での参加者を含めた事業チーム構成
麻酔科医２人　ハサヌディン大学医学部付属病院勤務（スラウェシ島マカッサル）
医学生１人　ハサヌディン大学医学部（スラウェシ島マカッサル）
通訳２人（柳井彰人　ジャカルタ在住交換留学生、インドネシア人通訳）
YKP スラカルタ　トミリヤント事務局長

◇事業内容
2010 年 11 月５日、インドネシア中部

ジャワ州メラピ火山の大規模な噴火により、呼吸器疾患外来患者17,770人、避難者30万人、死者168人（数字は11月9日付WHO情報）にのぼる被害が発生した。11月16日にAMDAは本部とインドネシア支部から医師、看護師等を派遣した。

AMDA医療チームは、11月18日からマゲラン県内で巡回診療を開始した。ジャワ島ではジャワ語しか話さない高齢者が多く、スラウェシ島から来た医師らでも通訳が必要となる場面があった。地元のボランティア団体「YKPスラカルタ」のトミリヤント氏や地元大学生の通訳を介することで、AMDAの医療支援活動を円滑に行うことができた。巡回診療では11月18日から23日までに515人の患者を診療した。呼吸器感染症、慢性疾患、胃炎、疲労の訴え（不定愁訴を含む）が多く見られた。ところによって、火山灰による眼痛や皮膚の掻痒感、下痢が多い。11月22日にはマゲラン県内の2つの村落で、支援物資8000人分の配給を行った。内訳は、毛布200枚、米800kg、砂糖200kg、塩20kg、ニンニク30kg、赤玉ねぎ60kg、黒ケチャップ小袋（14ml）1152個、茶150箱、油2リットル。

火山噴火発生から半年経った2011年5月5日～8日には、マゲラン県でフォローアップ活動を実施した。マゲラン県バンジュドノ村では、2010年11月の噴火の際に住民が避難し、幸いにも死者はあまり出なかった。しかし、溶岩により田んぼや村の共同墓地20ヘクタールが被害を受けた。5月8日、墓地移動や排水溝清掃のボランティア活動に参加した地元住民およそ100人にAMDAの支援物資（米400キロ、砂糖150キロ、調理用油168リットル、果物・お茶400セット）を手渡した。

◇受益者の声

日本の人びとは津波の被害を受けたにも関わらず、まだ私たちのことを考えてくれている。日本の人びとの支援に大変感謝します。（フォローアップ活動に参加した地元住民ボランティア）

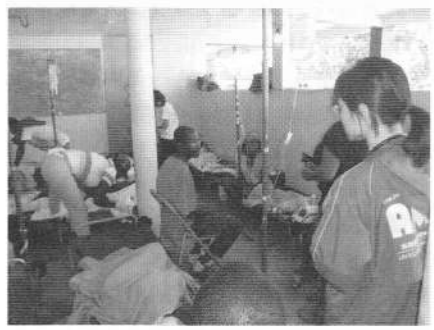
◇現地協力機関

YKPスラカルタ

インドネシア語でYayasan Krida Paramita Surakarta: YKPSurakarta

1989年設立　地域保健開発分野や生活向上のための事業を実施。調査研究・人材育成なども行っている。

■ハイチ コレラ対応緊急医療支援



◇実施場所　ハイチ共和国ポルトープランス、サンマルク、フォンテネグ。ドミニカ共和国サント・ドミンゴ

◇実施期間　2010年12月1日～12月26日、2011年1月23日～2月15日

◇派遣者　医師：菅波茂（ADMA代表）、朴 範子（広島市）、山本太郎（長崎市）、看護師：松本明子（長崎市）、調整員：ヴィーラヴァーグ・ニッティヤン（AMDA本部職員）の計5名。

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

上記チームに、ドミニカ共和国サント・ドミンゴ在住の森田加奈子調整員（AMDA駐在員）、カナダ在住のオズボーン助産師（AMDAカナダ支部）とメアリー・ルー看護師（同）の計3名が現地で参加。

◇事業内容

ハイチ共和国の首都ポルトープランス近郊では、2010年1月の大地震後、仮設テント生活を続ける人が多い中で、10月中旬からコレラの感染が急速に広がりました。AMDAは11月に緊急医療支援を決定し、12月1日に菅波代表、松本看護師、ヴィーラヴァーグ調整員が、同5日に朴医師（1月の震災後の救援にも参加）、同8日に山本医師（長崎大学熱帯医学研究所）がハイチに向け出発しました。

現地ではハイチ保健省の決定に従い、首都の西約120kmのフォンデネグ市内にあるサルベーション・アーミー（救世軍）病院で、同病院のスタッフと共に12月7日～24日の16日間で108人のコレラ患者を診療しました。必要な医薬品（経口補水剤、乳酸リンゲル輸液、亜鉛液体、抗生物質、点滴チューブ、使い捨て手袋など段ボール箱324個分）は森田調整員が隣国ドミニカ共和国で調達し、陸路輸送で同病院に寄贈しました。12月17日からは森田調整員とAMDAカナダ支部のオズボーン助産師が、クリスマス休暇で人手不足となった病院で看護に奮闘しました。

救世軍病院には、コレラ治療に不可欠な患者隔離用コレラ治療施設（CTF：Cholera Treatment Facility）がなく、AMDAは12月26日で一旦医療活動を終了しました。しかし患者は増え続け、同病院からの要請を受けて、再びAMDAカナダ支部のメアリー・ルー看護師とドミニカ駐在の森田調整員を派遣しました。2名は2011年1月23日にフォンテネグ市に到着、MDM（世界の医師団：MEDECINS DU MONDE）や救世軍病院等が共同で1月24日に開設したCTFで活動しました。

◇現地協力機関　在ドミニカ共和国日本大使館、ハイチ保健省、フォンテネグ市内のサルベーション・アーミー病院、WHO・PAHO（汎米保健機構/WHOアメリカ事務局/The Pan American Health Organization）、世界の医師団（MDF）

■ブラジル洪水被災者に対する緊急医療支援活動

◇実施場所　ブラジル連邦共和国　リオデジャネイロ州　ノバフリブルゴ市

◇実施期間

2011年1月18日～2月13日

◇派遣者

譚俊偉　総社市役所市民環境部人権まちづくり課国際交流推進係多文化共生推進員、総社ブラジリアンコミュニティ会長、サンパウロ出身、

石岡未和　看護師、AMDA本部職員

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

ノバフルブルゴ日系協会

渡辺会長（2月12日の活動に同行）

◇事業内容

ブラジル連邦共和国リオデジャネイロ州で2011年1月11日に台風による大雨の被害が発生した。豪雨に伴う洪水

や地滑りで800人を超える犠牲者が出た。ブラジルでの自然災害による人的被害としては、過去最大規模の惨事。家を失うなどして、約1万4000人が避難を余儀なくされた。このような状況をうけ、AMDAではAMDAグループと連携を結んでいる総社市と協議し、合同ミッションとして総社市嘱託職員のブラジル人である譚 俊偉(たん しゅんわい)氏とAMDA本部スタッフで看護師の石岡未和の派遣を決定した。

派遣チームは1月18日に日本をたち翌日ブラジル・サンパウロに到着し、20日にリオデジャネイロに移動。被害の大きかったノバフリブルゴ（Nova Friburgo）市は山奥にある町で、ブラジル陸軍・海軍が避難所を設営し、ブラジル赤十字が巡回診療を行なっており、生活支援物資の配給は、地元の行政機関や教会が行なっていた。しかし、降り続く雨によっていつ再び土砂災害が起こってもおかしくない状況が続いていたため、住民に安全な場所まで支援物資を取りに行かなければいけない状態であった。AMDAは「支援物資へのアクセスが難しい人々への直接的な物資の支援」としてリオデジャネイロ市で豆乳粉ミルク缶 250缶を調達し、2月12日ノバフリブルゴ市の被災家族へ豆乳粉ミルク缶を届けた。また、日系家族の方への儀損金支援も行った。

◇現地協力者の声

ブラジル赤十字 リオデジャネイロ支部 副支部長より。

「地球の反対である日本からわたしたちの支援に来てくれたことに感謝します。ブラジルには日本文化が馴染んでおり、ブラジル人は日本人が大好きです。日本は阪神大震災の大きな被害から復興し、地震などの災害対策が進んでいるとテレビで見ました。私たちも日本の災害に対する備えを見習いたい。いつか、きれいに戻ったブラジルを見に戻って来てください。」

◇現地協力機関

ブラジル赤十字、在リオデジャネイロ州日本国総領事館、リオデジャネイロ州日伯文化体育連盟

総社市職員タン氏

■ニュージーランド地震緊急医療支援活動

◇実施場所 ニュージーランド南島中部クライストチャーチ市

◇実施期間

2011年2月24日～3月4日

◇派遣者

ニッティヤーナンタン・ヴィーラヴァーグ 調整員/AMDA本部職員

石岡 未和 看護師/AMDA本部職員

村上 拓 岡山大学医学部医学科3年/AMSAメンバー

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

プニ・エミソ メドセン病院院長/外科医/サモア独立国首都アピア在住

武田 未央 保健師/ニュージーランド オークランド市在住

◇事業内容

2月22日ニュージーランドのクライストチャーチ市でマグニチュード6.3の地震が発生した。震源の深さは約5キロと浅く、多くの建物が倒壊した。地震直後はクライストチャーチ市内の80%で断水になり、飲料水の確保が急務とされていた。また、液状化による道路、橋梁への被害も大きかった。3月3日のニュージーランド政府発表によると、確認された死者数は161人、行方不明者は200人以上だった。

AMDA本部の調整員と看護師の2人は、2月24日に日本を出発し、翌日クライストチャーチ市へ入った。オークランド市在住の武田保健師と、サモアのプニ外科医が現地で合流した。

サモア独立国から参加していたプニ医師は、2月28日から3月2日までオーストラリア医療チームと共にアラヌイ地区の大型医療テントで診療活動を行った。チーム全体で一日約140人の患者を診療した。プニ医師は3日間で40人の患者を診療した。婦人科疾患、頭痛、身体の痛み、外傷・打撲などが多くみられた。

日本人の派遣者3人（保健師1人、看護師1人、医学生1人）は日本人安否不明留学生ご家族の付き添いや、外務省とニュージーランド警察からのご家族への説明会への随行、体調不良の方への対応、ご家族の方の話を聞くなど、24時間体制でご家族の心のケアを中心にサポートを行った。

ヴィーラヴァーグ調整員は、現地でのニーズを調査し、岡山県から託された貯水用ボトル（10リットルサイズ）200個のうち160個をクライストチャーチ市のヌゲール・バトン副市長へ贈呈した。40個はクライストチャーチ市のアラヌイ地区・ホーンビー地区の教会に直接渡し（3月1日）、教会を通じて被災した25～30家族に配っていただくことにした。

◇受益者の声

（娘さんが安否不明のお父さんから寄せられた手紙2月28日付）

『NZの皆様、日本の皆様へ』

私の娘は「世界に通じる医療従事者」を目指して語学研修中に、今回の地震にあいました。わずかな望みを持ってNZにやってきましたが、残念ながらまだ発見されず、生存は絶望的です。ここで出会った皆様方の温かい対応・支援に、感謝の意を述べさせていただきます。

地震発生直後からNZ政府は非常事態宣言を発し、文字通り政府・国民が一体となり救出活動にあたっています。その献身的な姿を見て、はるか9000kmも離れた地に留学先を選んだ娘の思いに納得しました。

日本政府は、地震発生直後から、外務省、現地NZ大使館、クライストチャーチ領事館を中心に総力を上げて対応されています。被害を受けた家族が、ややもすると甘えがちになる事柄にも真心を持って対応していただいている姿に頭が下がります。

私の娘の留学先を斡旋してくれた会社は、地震発生以降、つらくて寝れない家族に対し、24時間、1～2時間ごとに情報を流し続けてくれ、励まし、サポートしてくれました。

娘の友人はあらゆる手段を使って応援してくれました。現地に入るとボランティアの方々が親身になってサポートして下さっています。会社の指示で、急遽任務につかれた方々も、自分を見失いがちな家族の気持ちに寄り添って、対応してくれています。

メディアの方々も被災者の立場をよく考え、核心に迫る報道をしてくれています。まだ娘は見つかりませんが、多くの人々に支えられている娘は、幸せ者だと

感じています。

そして、何よりも高い技術力と崇高な精神をお持ちの各国の救援隊、レスキュー部隊の方々は、余震の続く中、危険もかえりみず救助に立ち向かっておられます。ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。

最後になりますが、救助にあたる方々が二次災害を受けられない事を、心よりお祈り致します。　以上

◇現地協力機関

パートナーシップ・ヘルス・カンタベリー（ニュージーランドの公衆衛生NPO、http://www.partnershiphealth.org.nz/Content/about-us.html）

■東日本大震災 緊急支援・復興支援活動

仙台市避難所での診療

◇実施場所　宮城県 / 仙台市若林区・青葉区、南三陸町、岩手県 / 釜石市、上閉伊郡大槌町

◇実施期間　緊急支援 2011 年 3 月 11 日以降次年度に継続

◇ 3 月 31 日までの派遣者

菅波茂医師 AMDA 理事長含む 101 名（医師 37 名、心理士 1 名、看護師 17 名、准看護士 1 名、助産師 2 名、介護士 2 名、薬剤師 3 名、調整員 38 名）

◇事業内容

2011 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震はマグニチュード 9.0 と国内観測史上最大規模で、直後の巨大津波は沿岸部に広く壊滅的な打撃を与えた。地震報道直後に緊急医療支援チームの派遣を決定し、翌 12 日夜には本部職員 2 人と医師 1 人が仙台市に到着した。13 日にはインド出張中の菅波代表が急きょ帰国し、他の医師ら 5 人と共に仙台へ入った。3 月中旬に活動地が岩手県釜石市・大槌町と宮城県南三陸町に確定すると、一週間交替で被災地に医師・看護師・調整員を派遣した。津波による死者・

岡山空港よりプライベート便で出発

行方不明者数が多大な一方、地震での直接の負傷者は少なく、避難所の医療ニーズは、慢性疾患やストレスの治療、電気や水道が復旧しない中での寒さや衛生状態悪化による感染症対策が中心となった。AMDA 医療チームは、避難所に医務室を設置して診療を行ったり、避難所や個人宅の巡回診療を行った。また、現地からのリクエストに従って、医療用品、食料品のみならず様々な大量の生活支援物資を手配した。3 月末までに岡山から 4 便のトラック物資輸を行い、他にもチャーターフライト便での派遣者移動にあわせ毎回物資の持ち込みを行った。（食料品、医薬品、カルテ、医療検査機器、飲料水、下着など生活支援物資、携帯充電器、事務用品など）。

◇受益者の声

「AMDA は避難者の気持ちに配慮した取り組みを数多くやってくれた。何よりも、避難所運営に係わって教職員の最強のパートナーとしてどんなに助けられたことか。」（大槌高校 高橋校長）

「AMDA チームには長期にわたり救護救援活動をしていただき、迅速な対応には目をみはるものがありました。」（南三陸町被災医師）

「駐在する AMDA の医師が変わることもありましたが、誰もが AMDA の医師として信頼し治療を受けていたので、医師が変わるたび『寂しいね、残念だね、感謝だね』と会話していました。」（釜石中学校避難者）

総社市からの電気自動車　釜石市

◇現地協力機関

＜活動要請者＞：宮城県、岩手県、仙台市医師会。＜初動時の拠点と輸送＞：「明るい社会をつくる運動」新潟支部、NPO 法人ひなたぼっこ（仙台市青葉区）。＜医療活動拠点＞：岩手県釜石市立釜石中学校、釜石市立双葉小学校、釜石市民体育館、岩手県立大槌高等学校、大槌町立寺野体育館弓道場、宮城県南三陸町立志津川小学校、南三陸町総合体育館及び「平成の森」避難所。

ASMP

AMDA Soul and Medicine Program

AMDA 医療と魂のプログラム

ASMP とは、第二次大戦戦没者そして近年の自然災害犠牲者に対して、宗派を超えた宗教者による合同慰霊祭を、災害被災者には AMDA による医療支援を実施することを通して、平和の追及を行おうとする、宗教者ボランティアと AMDA の合同事業。2000 年から毎年実施。

尚、各宗教者は自費参加している。

■ フィリピン

◇実施場所　フィリピン　コレヒドール島　サン・ホセ教会

◇実施期間　2010 年 6 月 12 日

◇派遣者

浄土宗西蓮寺（名古屋）　大田明光 住職、菅波茂　医師 /AMDA 理事長、ニティアン・ヴィーラヴァーグ　調整員 /AMDA 職員

◇参加者

カトリック神父、イスラム教等現地宗教者、P. チュア　医師 /AMDA インターナショナル名誉顧問

◇事業内容

第二次大戦中、日米、フィリピン軍が激戦を繰り広げ多くの人命が失われたコレヒドール島で第 9 回 AMDA 医療と魂のプログラムが行われた。第二次世界大戦

のすべての戦没者のための慰霊式典は、太平洋戦争記念館での献花式に始まり、コレヒドール平和公園で平和の木の植樹。その後サン・ホセ教会に場所を移し、キリスト教カトリック神父、イスラム教指導者、日本からの参列者等計40名の参加者とともに1時間半にわたって多宗教による祈りが捧げられた。菅波代表は、「過去の歴史から学び、相互扶助の精神と多様性の共存が世界の平和につながる」とスピーチを行った。また第二次世界大戦の砲撃の中で妹の出産を母親の真横で見守ったAMDA　インターナショナル名誉顧問のプリミティヴォ　チュア医師は、「第二次世界大戦激戦地でこれまでも慰霊祭を行ってきたが、今回のコレヒドール島での慰霊祭執行を長年願ってきた。今回の式典は、世界に平和の大切さを訴える大変意味のある式典であった。」と語った。

◇参加者の声

コレヒドール島は戦争による破壊がいかに凄惨で悲惨なものであったかを物語る証人の島である。この島でこのような式典が行われることは大変意義深い。世界から戦争がなくなる日が一日も早く訪れることを願っている。(参列した多くの宗教者)

◇現地協力機関

ナイツ　オブ　コロンブス、フィリピンイスラム教会、ジュビリー　イヴァンジェリカル　チャーチ、フィリピンカトリック教会。

■モンゴル

◇実施場所　モンゴル国　ウランバートル　ガンダン寺

◇実施期間　2010年8月23日

◇参加者

清水直樹　医師、北川文夫　岡山理科大学情報科学科教授、劉 渤江　岡山理科大学情報科学科教授、村上　拓 AMSA: アジア医学生連絡協議会 Japan メンバー / 岡山大学医学部3年、難波　妙　AMDA本部職員

◇参加者

AMDA モンゴル、 AMSA モンゴル、宗教法人大本　人類愛善会モンゴルセンター、 大本モンゴル本部

◇事業内容

AMDAは本年モンゴルにおいて、ノモハン事件従軍関係者への白内障手術提供をはじめとする眼科医療への支援をおこなった。同時にモンゴル仏教総本山ガンダン寺において、第3回AMDA　医療と魂のプログラム、平和祈願祭をモンゴル仏教、日本の宗教法人大本とともに執行した。71年前にモンゴル・旧満州国国境で起こった日本軍、旧ソ連軍・モンゴル連合軍による激戦を日本ではノモハン事件と呼んでいるが、モンゴルでは単なる事件ではなくモンゴル民族を分断したハルハ川戦争と認識されている。多くのソ連人、モンゴル人、日本人の犠牲者をだした。今回の式典には、日本から、宗教法人大本、人類愛善会モンゴルサマーキャンプ訪問団全員とAMDA　モンゴル、AMSAモンゴル、AMDAモンゴル国眼科医療奉仕団メンバーが参列。まずはAMDAモンゴル支部長、オユンチメグ医師が祭典の趣旨と経緯を説明。ガンダン寺僧侶16名が祭殿に整列し読経。その後、宗教法人大本とともにハルハ河戦争犠牲者供養と平和祈願を行った。尚、日本からの宗教者は毎回すべて自費での参加である。

◇受益者の声

AMDA　医療と魂のプログラムがモンゴルでは今年3回目となり、この平和祈願祭が毎年夏の恒例行事になることを大変嬉しくおもう。医療面でのご支援に加え、このように平和への祈りをも行うAMDAに対して敬意を表する。(モンゴル仏教総本山ガンダン寺　住職)

◇現地協力機関

人類愛善会モンゴルセンター　大本モンゴル本部AMDA　モンゴル、 AMSA　モンゴル、 アイリスツアー

長期支援

■ AMDAピース・クリニック

◇実施場所

インド　ビハール州　ブッダガヤ

◇実施期間　2009年11月～現在継続中

◇派遣者　ニティアン・ヴィーラヴァーグ　AMDA本部職員

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

スリランカ人アユルヴェーダ医師1名、現地セラピスト1名、アシスタント2名

◇事業内容

アユルヴェーダ治療を中心とする診察、無料医療キャンプ等の実施

2009年末の発足以来、AMDAピース・クリニックは、地元コミュニティーを対象にインドの伝統医学・アユルヴェーダの治療を行ってきた。単なる疾病の治療に留まらないアユルヴェーダは、何世紀にも渡って蓄積されてきたヒーリング科学の集大成といえる。アムダ・ピース・クリニックでは個人の心身の均衡を整え、免疫力の改善や心身のバランスを高めることで病気を予防することを主眼としている。

このクリニックは、国内はもとより世界24か国から500人の巡礼者や旅行者が来院するに至った。また地元コミュニティーにおいては無料医療キャンプなどの地域保健プロジェクトが根付いてきた。同クリニックでは、スリランカ人専門医を中心に、一名のセラピストと二名のアシスタントが月曜日から土曜日まで日々の診察にあたっている。診察料は最低料金で30ルピー、薬は直接購入価格で提供されている。料金は治療の内容と時間によって異なるが、地元住民には割引が適用される。

AMDAピース・クリニックでは無料医療キャンプや診療以外にも様々な活動を行っている。

・栄養プログラム

このプログラムは写真の子供が発端となり2010年に始まった。子供の母親は自ら命を絶ち、父親は残された家族を養う為、幼子を家に残して早朝から働きに出なくてはならず、その結果、子供が栄養失調に陥ってしまった為、クリニックでは毎月栄養補助を行うことになった。

・口唇口蓋裂手術の支援

ブッダガヤ近隣の村々で行った調査で約10件の口唇口蓋裂の症例が見つかった。その後、バラナシにあるスマイルズ病院の協力の下、クリニックでスクリーニングを行い、8名の患者を選出した。患者輸送の手配はアムダが行い、8名はバラナシで手術を受けるに至った。

・恵まれない子供たちへの文房具の配布

アムダ・ピース・クリニックから約3キロの場所に位置しているサッダンマ学校に文房具の寄贈を行った。

■ AMDA モンゴル眼科医療奉仕団と AMDA 医療と魂のプログラム

検眼する内田氏

◇**実施場所**　モンゴル、都市　ウランバートル

◇**実施期間**

第1次 2010年6月23日～7月1日
白内障手術、検眼セミナー

第2次 2010年8月21日～8月24日
白内障手術後検診、
医療と魂のプログラム

第3次 2010年9月4日～9月9日
モンゴル健康科学大学協力協定締結
菅波奨学金授与式

◇**派遣者**

第一次　内田豪（めがねコンサルタント）
難波　妙（AMDA本部）

第二次　清水直樹（内科医）（内科検診と白内障手術後の聞き取り調査担当）
岡山理科大学情報科学科　北川文夫先生、
劉 渤江先生（プロジェクト全体の記録）
AMSA（アジア医学生連絡協議会）Japan
メンバー　岡山大学3年　村上　拓
AMDA本部　難波　妙

第三次　菅波茂、菅波知子（自費参加）

◇**現地での参加者を含めた事業チーム構成**

医師6名、看護師2名、検眼師1名、現地調整員3名、日本側調整員3名、運転手1名、医学生6名（AMSA　モンゴル）1名（AMSA　Japan）

◇**現地協力機関**（市保健所、市役所など）

モンゴル国保健省、モンゴル眼科協会、
モンゴル宗教省　ガンダン寺、

◇**実施協力団体**

人類愛善会モンゴルセンター、City Optic

◇**事業内容**

09年度の現地調査を踏まえ、2010度は、白内障手術、検眼師セミナー、眼鏡の必要な子どもへの眼鏡無償提供、ガンダン寺における平和祈願祭、モンゴル国立健康科学大学との協力協定締結、菅波奨学金の授与などを実施。

白内障の手術についてはハルハ河戦争従軍者を中心にその配偶者など合わせて24名に実施。8月には日本側から清水内科医が渡豪。白内障患者様を中心に内科検診を実施した。

検眼師セミナーについては、めがね技術コンサルタントの内田豪氏によるハイレベルのセミナー実施され、120名のモンゴル各地から参加した眼科医に眼科協会から受講証と単位が認定された。今回のように外国人が検眼について講義するセミナーはモンゴル国初ということで、眼科医の先生方の関心も高く非常に熱心であった。

また、モンゴル国立健康科学大学との協力協定書締結が実現したことで、今後、モンゴルの医学生との協同プロジェクト実現の可能性が広がった。また同締結式で菅波奨学生1期生への奨学金授与も行われ、モンゴルの将来の医療界を担う人材を育成する一翼を担うことができた。

◇**裨益者の声**

白内障の手術を受けた方々の感想　第3病院

本当によくなりました。私は手術後、家へ帰ったのですが、家にある物が全部新しくなったように見えていました。

検眼師セミナー参加者の声

モンゴルの眼科医を含め、眼鏡店など全体に検眼技術の向上が必要だと参加者全体が認識した貴重な機会だった。今年度だけに終わらず次年度も是非行ってほしい。（眼科協会会長のコメント）

■アムダ・カンボジア支部 HIV/ エイズおよび性感染症防止に向けた青少年育成スポーツプログラム

◇**実施場所**　カンボジア・プノンペン

◇**実施期間**　2011年1月から継続中

◇**現地での参加者を含めた事業チーム構成**

AMDA カンボジア支部

現地ボランティア団体 The Happy Football Cambodia Organization (HFC)
プノンペン市内貧困地区の青少年達

◇**事業内容**

日常的に暴力や薬物依存、性感染症、とりわけHIV/エイズ感染の危機に晒されているプノンペン市内貧困地区の青少年を対象にサッカーを通じた啓蒙活動を実施。『薬物や暴力よりスポーツを』をテーマに、心身の健康、規律、物事への貢献、団結心を育むべく、市内プレア・シソヴァス高校にて毎週土曜・日曜の朝に練習を行っている。コーチにはカンボジアサッカー協会から専門家を派遣。また練習に必要な資材、Tシャツ、水の提供、練習場のレンタルの手配などを現地団体HFCが担当している。

また、参加者各々が自身のコミュニティーの教育者となるよう、HIV/エイズおよび性感染症防止に関する教育も行っている。

◇**現地協力機関**

・The Happy Football Cambodia Organization (HFC)
・カンボジアサッカー協会

AMDA の海外支部が事業主体として実施している事業

■ネパール東部ダマックにおける医療支援事業

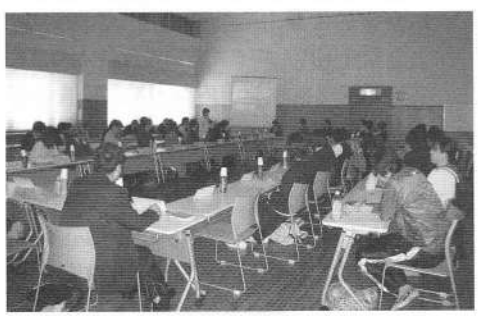
リフェラルヘルスセンター

ブータン難民と地元住民の双方を医療支援対象とした事業として 1992 年から、メチ県ジャパ郡ダマックで AMDA ネパールを実施主体として継続している。現在事業は、小児科病棟や HIV/ 性感染症予防事業、難民キャンプ内ヘルス・ケア事業、人材育成など他分野にわたる。

■バングラデシュ ABC プロジェクト AMDA Bank Complex

AMDA バングラデシュの洪水シェルター

AMDA バングラデシュが主体となり、健康、医療、女性を対象とする小規模貸付、職業訓練、教育、地域開発、など総合的な事業をガザリア地区において 1998 年より実施している。バングラデシュでは毎年のように水害に見舞われている。AMDA バングラデシュでは、水害等災害時の避難所となる建物を建設し活用している。また日本からの見学も積極的に受け入れている。



第 1 回市民参加型人道支援外交円卓会議　11 月 20 日

サッカーボールにメッセージ記入する高校生会

国内の動き

＜公開セミナー＞
岡山県立大学大学院
「災害医療援助特論」公開セミナー　9 月

＜大学講義＞
岡山大学、神戸大学、岡山県立大学大学院、
川崎医療福祉大学、福山平成大学、就実大学、
聖カタリナ大学、 相生市立看護専門学校 (15 限) 等

＜出張講演＞
小・中・高校、企業、官公庁、各種団体からの
講演依頼に対応　計 61 件

＜国内連携＞
・大学との連携 / 岡山県立大学との連携協定調印　7 月
・各種団体との連携 /FC 千里中央との連携協定　12 月

＜海外活動地視察教育プログラム＞
AMDA バングラデシュ事業視察ツアー実施　3 月

＜主なイベント実施／参加＞
・あすか健康村フェスティバル　4 月
・AMDA バングラデシュ
ディレクター日本招聘　玉野クラブ交流会　4 月
・おかやまコープ夏の親子イベント　8 月
・かんなべ福祉まつり　9 月
・RNN ヒーリングコンサート / ハイチ・チリ・
中国青海省犠牲者への慰霊と復興を祈る集い　11 月
・第一回 AMDA グループ
市民参加型人道支援外交円卓会議（**写真**）　11 月
・ワン・ワールド・フェスティバル（大阪）　2 月
・チャリティ洋蘭展　3 月

＜ AMDA 高校生会＞
ハイチ支援、東日本支援に関する各種活動、学習
会を通年実施

＜日本招聘＞
ハイチから　AMDA 支援義足着装のガエル・エズ
ナールさん（学生 18 歳・女性）　1 月

AMDA 高校生会 2010 年度活動年表

2010 年　4 月	AMDA 高校生会パンフレット作成 あすか健康村フェスティバル参加 (茶山亭)
5 月	「国際ソロプチミスト岡山愛の基金」助成金申請 (ハイチ復興支援スポーツ交流推進プロジェクト)
7 月	一宮フェスティバル参加 ハイチ復興支援スポーツ交流に向け準備開始 ・高校生からのメッセージ及び活動紹介の作成 (DVD) ・サッカーボールにメッセージ記入（**写真**）
8 月	・ハイチの学生に渡すミサンガ作成（準備した品物を 交流地ドミニカ共和国に派遣されたスタッフに託ける）
11 月	パキスタン洪水についての街頭募金 (AMDA ボランティアセンターのスタッフと共に) 岡山大学鹿田祭参加（パネル展示、顔アート作成展示）
2011 年　1 月	AMDA 高校生会を中心とした学習会 (国際協力について)
2 月	学習会 (世界の子ども達の現状について他)
3 月	学習会 (ニュージーンド地震の AMDA からの支援活動報告) 東日本大震災支援活動開始 ・岩手県大槌高校へのメッセージを作成、スタッフへ託ける ・街頭募金 (ボランティアセンタースタッフ他と共に)

AMDA：特定非営利活動法人アムダ

役員名簿

理事長	菅波　茂 AMDA グループ代表 元（医）アスカ会理事長
副理事長	菅波　知子 元（社福）遊々会理事長 元（医）アスカ会副理事長
理事	小島　光信 両備ホールディングス（株） 代表取締役社長
理事	日南　香 元岡山県議会議員
理事	中西　泉 （医）慶泉会理事長 町谷原病院院長
理事	成澤　貴子 特定非営利活動法人アムダ ボランティアセンター事務局長
理事	難波　妙 特定非営利活動法人アムダ 代表部　部長
監事	的野　秀利 公設国際貢献大学校　校営管理者

AMDA 団体概要

所在地　〒700-0013 岡山県岡山市北区伊福町 3-31-1

設立年月日　1984 年 8 月

国連経済社会理事会「総合協議資格」取得

岡山県認証　特定非営利活動法人アムダ：AMDA

理事 7 人　監事 1 人

理事長及びグループ代表　菅波　茂

AMDA グループ構成団体

AMDA インターナショナル（任意団体）

特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構

アムダ国際福祉事業団

特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター

海外活動：

緊急医療支援、復興支援、合同医療ミッション、スポーツ親善交流、ASMP、セミナー開催等

活動国：ハイチ、インドネシア、モンゴル、カンボジア、ネパール、中国、日本他

国内活動：

出張講演、大学講義講師受付、活動報告会・セミナー開催、国内防災訓練対応、高校生会

ボランティア地域組織 3 支部・7 クラブの各地域での活動

AMDA 支部：

兵庫県支部、神奈川支部、沖縄支部

AMDA クラブ：

鎌倉、福山、高知、玉野、竹原、大槌、夕張、神女（神戸女子大学）

事務局スタッフ：常勤 6 人 非常勤 7 人 嘱託 1 人

会員数：1,215 人　　以上、7 月 1 日現在

＜平成 22 年度　決算報告＞

収支計算書

自　平成 22 年 4 月 1 日　至　平成 23 年 3 月 31 日　（単位：円）

科　目	金　額	
Ⅰ　収入の部		
寄付金収入		187,581,242
会費収入		9,813,500
助成金収入		1,320,523
販売収入		299,062
その他収入		867,841
当期収入合計		199,882,168
Ⅱ　支出の部		
事業費		
緊急救援事業費	31,161,687	
災害復興支援事業費	28,982,260	
中長期事業費	18,638,103	
日本国内事業費	9,756,930	88,538,980
共通管理費		17,799,283
当期支出合計		106,338,263
当期収支差額		93,543,905
前期繰越収支差額		165,158,216
次期繰越収支差額		258,702,121

貸借対照表

平成 23 年 3 月 31 日現在　　（単位：円）

資産の部		負債の部	
科目名	金額	科目名	金額
Ⅰ流動資産	262,444,308	流動負債	6,857,957
現金	3,802,170	未払金	4,040,687
預金	251,935,884	預り金	2,817,270
商品・棚卸資産	1,731,716		
立替金	1,000,000	負債合計	6,857,957
仮払金	3,974,538		
Ⅱ固定資産	3,115,770		
有形固定資産	2,660,595		
建物附属設備	719,250	正味財産の部	
器具備品	3,357,601		
減価償却累計額	▲ 1,416,256	正味財産	258,702,121
無形固定資産	455,175	（うち当期正味財産増加額）	93,543,905
ソフトウエア	455,175		
資産合計	265,560,078	負債及び正味財産合計	265,560,078

平成 22 年度 特定非営利活動法人 AMDA 決算報告に関する監査報告書

自　平成 22 年 4 月　1 日

至　平成 23 年 3 月 31 日

上記決算報告書は、監査の結果適正にして妥当なものと認めます。

平成 23 年 6 月 17 日

監事　竹元武

監事　田村政

平成 22 年度も多くの皆さまの温かい御支援により
事業を実施することができました。
ありがとうございました。